

あたたか歌声三味線のせ

LET'S



全国の民謡を学び、味わいながら、お年寄りと一緒に楽しむ守山市のサークル「正山会」。会員は20～70歳代の10人で、半数が市内の病院や高齢者施設に勤務しており、主に市内のデイサービスセンターなどを訪ね、三味線や尺八、太鼓の音とともに、のどかであたたかい歌声を届けている。

守山・正山会

高齢者施設へ民謡届けます

同市播磨田町で、デイサービス、デイサロン事業を行う「ゆうらいふ」でのひとコマ。演奏に合わせ、お年寄りやスタッフが山形県の「花笠音頭」をにぎやかに歌い、会員がしつとりと歌い上げる湖国の「琵琶湖舟歌」に聴き入った。

会員で同施設の所長を務める奥野登美子さん(47)も三味線でムードを盛り上げた。

施設利用者の松岡光男さん(82)が「民謡はええ、晴れた日みたいに見える気分」と手拍子。尺八担当で自営業水田俊克さん(57)は

「民謡を聞き、懐かしいと喜んでもらえることにやりがいを感じる」と言う。

24年前に民謡同好会として発足したが、7年前、民謡によるボランティア活動をしていた主婦中島房子さん(74)が加入したのを機に、同市社会福祉協議会にボランティア登録した。

病院で技師として働く堀正弘さん(60)が「民謡を楽しむ会で」と紹介。慰問活動は都合の付く会員が担当する。

練習は市民交流センター(守山市守山)で毎週水曜日午後6時から10時まで。堀さんが歌や三味線を、尺八は都山流師範の会社員山本勝巳さん(64)が指導。岸栄さん(79)や中島さんも30年以上の経験があり、初心者も含めけい

懐かしさ喜ばれやりがい

民謡を味わい、楽しんでもおうと練習に励む会員たち



「を」をつける。

20年ぶりに民謡を再開したそばん塾経営利倉省三さん(72)が「先輩の人格にほれ込んで入会した」と言い、パート勤務の斉藤頼子さん(59)は「仕事をもち、家庭を持つ会員のペースに合わせて指導してもらえのりがいい」と感謝する。

勤め先の高齢者施設でも三味線を披露する中西千枝子さん(54)は「皆さんほめ上手で」と照れる。子育て中で練習を休むことが多いという中西鈴子さん(29)も「ぶしの回し方などが難しいですが、会のあたたかい雰囲気が良くて続けています」と話していた。

* 会は新規入会者を募っている。問い合わせは、市社会福祉協議会(077・522・5500)へ。



指導の会員が歌う民謡に合わせて楽器の練習(守山市)

会員は次のみなさん
 岸栄、堀正弘、山本勝巳、中島房子、奥野登美子、中西千枝子、中西鈴子、利倉省三、斉藤頼子、水田俊克

■□日本の民謡■□
 財団法人・日本民謡協会(東京)によると、民謡は全国各地で自然発生的に生まれ、伝承されてきた。農民や漁師らが仕事の苦しさをまぎらわすためや、はかどらせるために、作歌に合わせて歌った「労働歌」、正月や結婚などのめでたい行事、儀式に歌う「祝い歌」のほか、慰安として踊りを伴った「踊り歌」などがある。

慰問先のお年寄りも一緒に歌う。守山市播磨田町の「ゆうらいふ」で民謡を披露する会員たち